

京都市文化觀光資源保護財団

# 会報

No. 29



## もくじ

- シリーズまもる㉙ 二条城障壁画の模写(1) 川面 稜一 P 3  
古い寺に住んで(6) 清水寺今昔 清水寺管長 大西良慶 P 5  
「文化財紹介」 祇園祭 蟠螺山の復活をむかえて  
蟠螺山保存会々長 津田菊太朗 P 6  
京都の文化的伝統とこれから町づくり(4) 京都大学教授 西川 幸治 P 8  
古代政治と仏教—3— 作家 松本清張 P 9  
保護財団の活動 P 10

会報題字 理事長佐伯 勇

## 会報

No. 29

56. 5. 15

編集・発行

財団 京都市文化觀光資源保護財団  
法人 京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内  
〒606 電話 075-752-0235 (代)

**募金にご協力いただき  
ありがとうございました**

寄付者芳名録(敬称略) 55.10.31~56.2.28

**法人及び団体の部**

**[特別会員]**

※財団法人 不審庵 <330万円>  
株式会社 京都プリンスホテル <55万円>

**[普通会員]**

※株式会社 緑風荘 <30万円>  
京都市文化観光局有志職員一同 <23万5千8百円>  
※要建設株式会社 <22万円>

※株式会社 佐々浪ファマシー <12万円>

**[賛助員]**

※土屋便利堂 <6万円>  
※株式会社 曾根商店 <4万8千円>  
※ヤマカワ株式会社 <3万2千円>  
※吉兆嵯峨支店 <2万5千円>  
※有限会社 佐々木勉強堂東店 <2万円>  
※京都料理組合 <2万円>

**一社寺の部**

**[特別会員]** ※松尾大社 <90万円>

**一個人の部**

**[特別会員]**

※伊砂利彦 <100万円>  
田中清 <50万円>  
村上健三郎 <50万円>  
※竹村實 <13万円>  
※岩佐氏熙 <12万円>

**[普通会員]**

※梅岡大祐 <9万3千円>  
※田中正男 <9万1千5百円>  
※丸山末棹 <7万9千7百円>  
※佐野綾子 <6万3千円>  
※奈良行博 <6万円>  
※堀池嘉一 <5万8千円>  
※天野和夫 <5万円>  
山崎長三郎 <5万円>  
※高橋一男 <4万4千円>  
※増田勇三 <4万3千円>  
※児玉誠 <4万1千円>  
※鬼頭侃 <4万円>  
※土手修 <4万円>  
※鳴津峯眞 <3万6千円>  
※竹内キミ子 <3万5千3百円>  
※内田和正 <3万3千円>  
※加藤雅一 <3万2千円>  
※西脇弘長 <3万円>  
※松島浩子 <2万9千円>  
※広岡一 <2万5千円>  
※長谷川すみゑ <2万5千円>  
※有本安喜子 <2万3千円>  
※奥崎一郎 <2万1千円>

※上田智恵宗 <2万円>

**[賛助員]**

※上田真一 <1万7千円>  
※近藤吉男 <1万3千円>  
※西原寿子 <1万1千円>  
※小野初恵 <1万3百円>  
那田可つ <1万円>  
※島田崇志 <1万円>  
梅木村作 <1万円>  
※水谷勢津子 <1万円>  
山崎次策 <1万円>  
中野豊治 <1万円>  
柴田二郎 <1万円>  
中島貞代 <1万円>  
※高木春三 <9千5百円>  
※大野健三 <9千円>  
※矢野芳子 <8千5百円>  
※閏崎みのり <8千3百円>  
※田中常夫 <7千円>  
※平野和彦 <6千5百円>  
※今村敏子 <6千2百円>  
※手塚栄子 <6千円>  
※盛田准子 <6千円>  
古川茂一 <5千円>  
石田修一 <5千円>  
※村井進 <4千3百円>  
※東森昇一郎 <4千円>  
※遠藤伊之助 <4千円>  
※奥野勝 <4千円>  
※中村正子 <4千円>  
※前川貞一 <3千円>  
※森田アキ子 <3千円>  
伊藤昭安田孝夫 <3千円>  
※青木文子 <3千円>  
奥崎まさき余田善三郎 <3千円>  
秋山松太郎 <3千円>  
※東森政治世 <3千円>  
※高田京子 <2千円>  
※古川正義 <2千円>  
※岡本直三 <2千円>  
※入山博順利 <2千円>  
小川川谷下内司彦 <2千円>  
中門松池茂清 <1千円>  
谷下内奢彦 <1千円>  
池伯進 <1千円>  
桜井のぶ子 <1千円>  
田村文雄 <1千円>

(※印は追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額)

# 二条城障壁画の模写 (1)

日本画家 川面稜一

二条城の障壁画は、戦中戦後の混乱期を無事に管理されてきたおかげで、昨今の様に多くの人々に観賞されて、当時の姿をそのまま直接に見られる数少ない例である。京都に襖絵は多くあっても、その建物のために描かれた物と何とか他所から持ち込まれたものとがある。持ち込まれた襖絵は、何となく建物に調和せず、異和感を感じるものである。

二条城の二の丸御殿は、遠侍の間、式台の間、大広間、黒書院、白書院と雁行する御殿の形式も整っており、襖絵の画題も、御殿に上がつて最初の遠侍の間は客人を畏怖睥睨する猛獸を描き、次の式台の間は、松樹等に順次に牡丹、桜、最後の將軍の居間は、水墨山水と静かな画題になって、一枚一枚の襖絵の良さは勿論、御殿全体の画題の配置の巧みさもよく考えられたものである。

二の丸御殿の障壁画は、襖、戸襖、杉戸、天井等を合わせて、1013枚にもなる。昭和47年から模写を始めて今年で9年目、173枚仕上げている。この調子で進めば、昭和75年に完成という大計画である。

模写の方針としては、

1 現状模写

2 復元模写

3 古色復元模写

の三種類がある。

現状模写とは、現在昭和56年はこのような状態であったという古色、剥落、キズもそのまま忠実に模写する方法である。

復元模写とは、描かれた当時（江戸時代初期）は、このようであったと推定し、色調も鮮やかなものに復元する。

古色復元模写とは剥落、キズは写さず図柄は出来る限り復元し、色調も復元す

るが全く描かれた当時のままに復元すると、古色を帯びた建物の中に嵌め込んだ場合、その雰囲気を壊すので、建物に調和させた幾分古色を帯びた色調にする模写である。

二条城では、第三の古色復元模写の方針で進めている。これは、色調をどの程度にするかという事。例えば、松の緑青については色相、彩度を定めるのに苦労するのである。画家が、試しに色を作り出し試作品を作って、土居次義先生の美術史の立場からの指導により模写を進めている。方法としては、御殿内の取り外せる襖



およそ30年の歳月をかけてつづけられる模写作業

は、取り外して模写室に持ち込む。取り外しの出来ない壁貼付は、御殿内で下図を作り、部分的に原色写真を撮って参考にする。

### 模写の順序

普通は、揚げ写しといって、現物の上に模写する紙を直接あてて、紙の上げおろしをしながら骨書き、彩色をするのである。この方法は、現物と密着してよいのであるが、二条城のように金箔が貼ってあると、上げおろしの紙が金箔に折れ目をつけ、それに古色が入り込むので、その方法ではなく、現物の上にトレコートというフィルム状のトレース紙（温度、湿度による伸縮が絶対に無い。）を置いて、上げ写しにより現物に忠実に模写する。この時に、もとの作家の気持ちを頭に入れて筆順など、何処から描き始めたか、起筆の筆の方向などを充分注意する。

墨による骨書きが終われば次は彩色、絵具が何であるかを検討する。岩絵具が多いので、その粒子と色調を研究する。400年を経ているので、植物性顔料は、退色しているし、銀泥は変色している。顔料の変化を常に考えて色調を復元していく。その下図が完成した時には、各々の担当の襖絵を画家が、互いに入れかわり原画と照合し再検討する。

次に、その下図と本紙の間に、ネン紙（日本式カーボン紙…柳の焼炭を、生漉の簿紙に擦り込む。）を入れて、鉄筆で写す。

次に、骨書きをする。狩野派の筆法の懸腕直筆、これを描くのが一番難しいところである。

骨書きが終われば、次は金箔貼りである。

金碧障屏画といえば、全面金箔が貼ってあって、その上に絵が描かれているように思うが、絵の下、例えば松の幹はもちろん、桜の花の下

にも金箔が無いのが普通である。それは、金箔の節約の意味もあるが、紙に直接顔料を塗った方が、その接着力がよいためであろうと思われる。それで、金箔を除きたい部分に簿紙でエンプタを水で貼り、金箔貼りをする。金箔も時代により大きさが異なるのであるが、10厘角の特別小箔を貼っている。金箔が貼り終われば、その上に古色を付ける。どの程度の古色を付けるかは、描かれている題材と部屋の雰囲気で決める。古色が付けばエンプタをはずして、愈々彩色にかかるのである。

以上のような順序を経て、一枚の襖絵は仕上がっていくのである。

狩野派の画師達も、主だった人々は、探幽、尚信で興以が補佐役である。その一門の人々はもっとすらすらと描き上げた事と思う。

今、私達は、点検に検討を重ねて、しかも当時の画家の作画の心にたちかえって、模写を進めている。昭和47年、模写の始まった時から指導監督には、障壁画の研究の権威者、京都工芸繊維大学名誉教授 土居次義先生の指導を受けている。画家としては、多くの人々が入れかわり、立ちかわりしたが、現在は、川面稟一、白岩徳三朗、大野俊明、谷井俊英、川面かおりの5人が模写に当っている。

### ※エンプタ

桜の花の形に抜きたい時には、簿紙で花の形を写し、それを本紙の上に水で貼りその上に金箔を貼る。

## 古い寺に住んで(6)

### 清水寺今昔

清水寺は、約1200年の歴史があり、この間に数度の災火にみまわれ、現在の大部分の建造物は江戸時代の寛永10年（1633）に再建されたものです。国宝本堂をはじめ15棟の堂塔と仏像・絵画等が重要文化財に指定されております。

当寺は、御所の公家とつながりがあったため、江戸時代末には近衛公が歌の先生、飛鳥井公はけまりの先生で、お公家さまが「お山へ」といわれれば清水寺の事で、よく清水寺には詣っておられました。幕末、徳川家と京都との仲が悪くなり、薩摩が近衛公と親類のため、勤皇僧月照は薩摩に逃がれて西郷隆盛と薩摩の海に身を沈めるということもおこりました。

明治になって、廢仏毀釈が起こり、私の師匠園部忍慶和上が一人で清水にいるという時代がありました。このような時代ですから、寺の世話をする者は、ばらばらになり、仏さまのお給仕をする者さえいない状態がありました。諸堂は屋根が落ち、床は腐り、舞台には人も乗れない有様で、寺の経済状態は思うに任せず、いただく食事は寒天と高野豆腐の炊いたものばかりで、これはみな観音さまへのお供のおさがりで、豆腐のような上等は口にもできなかったほどで、まことにあわれなものがありました。

私は、15才で興福寺に入り、その時、挨拶に清水に来て、成就院で忍慶和上に一度おあいしましたが、忍慶和上は悪いことにご病気であり、まもなく亡くなられました。

その後、寺は、法隆寺の千早貌下に名目だけの住職をもってもらい、あとは小僧でなんとかやっていくような状態で、まともに法要を務める事もできず、建仁寺や真言宗の寺に手伝ってもらい日々を送っていました。

明治の中期、京都初代市長内貴甚三郎氏や寺村、平井等各氏が信徒総代に就任し、境内整備や諸堂の大修理が進められることになりました。

かくて、馬駐移転、本堂より奥の院への玉垣新設、随求堂、釈迦堂修理・本堂大修理・奥の院屋根の葺替えと舞台修理、音羽の滝附近敷石敷設等10年の間に諸工事が行われたのであります。その後、大正年間も諸堂修理、境内整備がなされ現在の境内の大勢ができたのであります。昭和に入りましても3度の本堂舞台修理、その他諸堂境内整備、特に43年には境内全域の防災工事等が完成し現在に至っております。

このように法灯を守ってこられましたのは、観音さまの信者、西国巡拝の皆様方、その他日本全国民や世界の多くの人々の御尽力のお蔭であると、深く感謝しております。

清水寺管長

大 西 良 慶

## 祇園祭 蟠螂山の復活をむかえて

蟠螂山保存会

会長 津田菊太朗



祇園祭の蟠螂山は、約100年余り休み山として巡行に参加出来なかったが、昭和52年の春頃より町内において、復元の機運がみなぎり、関係者との話し合いも再度にわたり行なわれた。その結果、保存会を結成して復元することになり、その後は遅々たる歩みでありましたが、文化財保存に重点をおき年次計画をたてて、この事業に一生懸命取りくみました。

一例としては、享和2年（1802）新調の銘がある現存の御所車は復元する年代の基準をこの時期に定め時代考証を研究して復元事業を行ないました。こうした復元事業をしてみてはじめて現存の御所車を企画した人々の真情を知ることができ、また御所車の装飾品に数多くみられる技巧の心臓や縁起を秘めた作法があることも教えられました。

このように先人の真情や技巧を学んだわれわれ、この事業にたずさわる者は、関係者のご指導を基本に歳月をかけ計画的に実践活動を行うよう特に心した次第です。

ふりかえってみると、蟠螂山の由来には確実な資料がなく、いいつたえをたよりに手探しに近い状況のなかで諸説を継ぎたして研究しました。しかし、詳細な由来がわからなかつたた

め心労のすえ、当時当町内に館のあった四条家、<sup>やかな</sup>松浦家、有馬家、及び渡来人の陳家の子孫の現住地を調べ、東奔西走して史実の資料を得て沿革の大要を知ることができたようなわけです。

蟠螂山の縁起は、中国「梁」の「武帝」の長子であった「昭明太子」の「詩文集」『文選』中にある言葉「蟠螂の斧を以て隆車の隧を禦がんと欲す」という故事にちなんだものといわれます。南北朝時代、当町内東側に居住していた四条隆資卿が、正中の変（1324）、元弘の乱



一江戸時代 天明大火以前の蟠螂山—  
宝曆年間の「祇園御靈会細紀」から

(1331)に討幕の計に参画し、のち後村上天皇を補佐し男山八幡で足利義詮（義満の父）軍と戦い衆寡敵せざ戦死された年が正平7年(1352)であり『常樂記』に「八幡方没落四条一品隆資卿他界60」と記すとあります。その四条隆資卿の勇猛果敢な武勇が公卿としては稀であり、しかも蟻の生態とよく似ていることから当町西側一画に居住していた渡来人の陳宗敬（外郎）(子)陳大年(外郎)一医薬を業として、蔭で平戸貿易を営み京洛の富豪に外国品を流していた有力者一が町衆と深く交り、当時の幕政の悪権力に対しレジスタンスを試み、四条家の御所車の払い下げを受け蟻の模型を乗せ祇園祭の巡行に参加したといわれます。これが京洛の大衆の大喝采を受けたことは、屏風絵の町田本、上杉本、等々の洛中洛外図屏風に数多く描かれ現在なお豪華な色彩とその優美さにひたれることからも知ることができます。

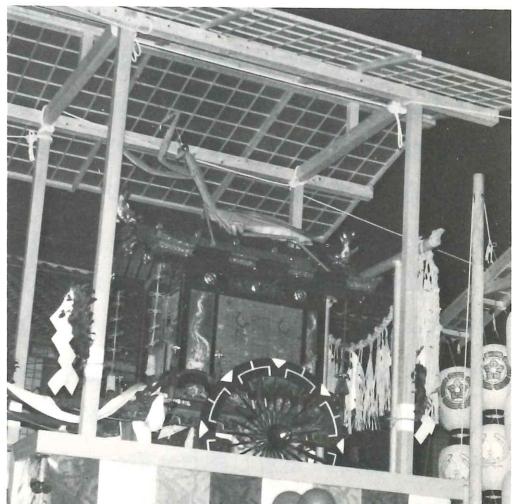
蟻山の起源は、隆資卿戦死後25忌目の法要のあった永和2年(1376)であり、その後も度々の戦火にあい焼失したものの年月浅く再興されていることは、町衆の意氣と自負並びに隆資卿に対する愛情がいかに強く深いものであったからであると思われます。

この町衆の心情のかげには、松浦家と陳家、のちには久留米藩の京都屋敷の有馬家の大きな援助があったことも忘れるわけにはいきません。こうして、天明大火後は焼失した網代車にかわり唐廬しの御所車が新調され、屋根には天主閣のシンボルにみられる金塗りの鯱が乗り、大名有馬氏の加護らしく大変革したことは、現在も心ある人々の話題になっております。唐廬しの螺鈿と菊唐草模様の透し彫金具は豪華であり、

又由来を表現出来る龍の彩彫飾、或は唐橋の木彫、葵の総角刺繡の模様等は、みるものをしてその技巧に心をうたれ、また楽しませてくれます。

幸にして蟻山は幕末の戦火は免がれたが、有馬家の東京移住と町民離散のため一時期には其の機能も失い現在に至る約100年余り巡行に参加できなかったのが、今回その道が開けたことは何事にもかえがたく感激の念ひとしおであります。今回の復元には特に蟻と絡繆の大改造に歳月を要しましたが、これは山鉢唯一のからくりとして今年の巡行に華を添えることと思われます。

現代の人心の動向には心情の相違があるようで特に文化財に関しては、そのギャップもみられ苦難の思い出もありましたが、旧知の恩情と励ましの言葉に労苦を忘れ文化財保存に一層こころして復元に余生をかけることを楽しみにしつつ今後もこの山の完成に努力したいと考えています。



今年およそ百年ぶりで復活する  
蟻山。一昨年の宵山飾りより

## 京都の文化的伝統と これからの中づくり(4)

京都大学教授 西川幸治

### 近代の京都

幕末のきびしい苦しみを通して大政奉還を迎える。しかし、近代国家日本の中心は京都から東京へと移った。この遷都は京都に深い衝撃をあたえた。京都に空洞化の現象がおこった。衰退した奈良のような悲劇をくり返さない為に、京都の人々は大きな努力をする。

明治の京都人は、京都策—京都の復興策—ということばをよく使った。第一期の京都策は、榎村知事による京都の近代的産業を導入する努力である。これは、新しい西洋の技術を導入して京都の伝統的な西陣機業や友禅染、織物など伝統産業と結び合わせ、又、ビール工場、製紙工場など全国に先がけて建設など、実験的なところみが行なわれたのである。また、第一期の京都策では、京都の近代化を非常に幅広い面でとらえ小学校、女学校はじめ外国語学校、図書館などを全国にさきがけて最初に設け、又伝統的な町組の組織の上に小学校の校区も設けたのである。このようななかたちで非常に幅広い教育あるいは風俗の上で近代化を進めてゆき、これが現在の学問文化の中心としての京都の地位を近代において確固たるものとしたのである。

しかし、近代産業というものは臨海性であり、海をもたない京都は、なかなかうまくいかなかった。近代産業が定着しにくかったため、それを克服するため第二の京都策というものが北垣知事によって進められた。

第二期の京都策は、琵琶湖疏水の建設である。琵琶湖疏水の計画は、京都の内陸都市の矛盾をなげてききた京都市民のはげしい願望であったが、これが明治になりやっと実現してくる。琵琶湖と京都を結ぶ運輸を進めあるいは洛北に水路をひいて灌漑用水を確保し、防災のための水の確保や堀川をはじめとする小さな河川に水を豊富に流すことにより浄化し、消火や衛生の役割を果たすなどの多目的な機能をもつ地域の総合開発であり、これは日本における地域総合開発の先駆でもあった。

琵琶湖疏水の当初計画では、現在の蹴上のあたりから北へ水路をのばし、その上に水車を起き、水車の動力により伝統産業の動力化をはかる構想であった。ところが、アメリカのアスペンで小規模ながら水力発電に成功したという情報を知ると田辯朔郎は、当初計画を変更し、蹴上に発電所をつくり西陣や京都の伝統産業の地域に電力をおくって、その近代化を図り、東山山麓の歴史的環境を維持することに成功した。そして、この電力をを利用して全国に先がけて市電をはしらせ、平安京1400年記念祭と第4回国内勧業博覧会をひらき、全国に復興した近代京都の心意気を示したのである。

京都の歴史は、けっして安易な平穏なものではなく非常に厳しい時代を人々は、その時代にそれぞれ努力し、そして常に新しい時代にふさわしく町づくりをつづけてきたのである。先人たちは、京都の文化的伝統をたえず再生させ発展させながら、それぞれの時代に人々が誇らしい文化的な環境をかたちづくってきたのである。

(以下次回へ続く)

(財團設立10周年記念 文化講演会における講演録)

## 古代政治と仏教 -3-

作家 松本清張

盧遮那仏<sup>るしゃな</sup>というのは、密教でいう大日如来であり、つまり全世界の宗教的統治者であります。太陽神すなわちアフラ=マズダです。則天武后がつくろうとした盧遮那仏の大像は、ではどこからヒントを得たかというとやはり、これまた西アジアの方である。バーミヤンの石窟<sup>いしづつ</sup>という大きな彫像がある。断崖の中に石窟を掘って、そして浮彫の大きな像がつくられている。石窟の中に大きな仏像をつくるというのは、やはりインドは暑いところですから、涼しいところは岩陰あるいは洞窟の中ですからそういう所に坊主やその他の人達が暑さを避けて住んでいたから、そこで仏像をつくるということで石窟がはやるわけです。

中央アジアのバーミヤンからその大像は東の方に移り、現在残っている遺跡では敦煌<sup>とうこう</sup>あるいは長安の少し西の麦積山<sup>ばくせきさん</sup>というところがありますが、そこも同じようなことがある。そして、魏の都であった山西省の平城にもこの大像の石窟がつくられる。魏が洛陽に都をつくりますとそこにも石窟がつくられる。これは魏の時代だけではなく唐にまでずっと及んでいる。いずれにしても、そういうものには必ず大像があります。これを聖武天皇が真似をしたわけです。では何故敦煌にしても洛陽にしてもそういう仏像が盛んにつくられたのかというとこれは、時の君主が統治政策の道具として仏教を奨励したからです。特に、五胡十六国時代<sup>ごこじゅうろくこく</sup>は先に述べたように北方の遊牧民族が中原におりてきてそし

て漢民族を征服する。そうすると、胡族国家の君主はどうしても異民族である漢民族と遊牧民族との融合を計らなければいけない。それにはやはり人類平等の仏教が一番なのです。

中国に入った時の仏教は、道教、これは中国古来の民間信仰であります、その道教と仏教とは一般民衆には区別がつかなかったが、だいに仏教となっていく。その仏教をひろめるには、どうしても君主でならなければならないわけです。

五胡十六国<sup>ごうちじゅうろくこく</sup>の君主、例えば後趙、前秦<sup>ぜんしん</sup>や北涼<sup>ほくりょう</sup>などの君主はみんな仏教信者でした。それからその北中国を中国の北半分を統一した北魏にしても、やはり君主は熱心な仏教信者です。日本の飛鳥時代の聖德太子が手本としたのは、北魏から隨に至っての仏教政策であります。そして、北魏を継承して全土を統一した隨も仏教政策です。

唐の時代にもやはり仏教政策を続けている。これは、仏教がありがたいからではなく先に述べたとおり恐らくヘレニズム的な要素によると思います。その証拠にその頃、中国に入った仏教は、みんな光明に関係がある。経文が多いのである。やはり胡人の翻訳ですけれども金光明最勝王經<sup>こんこうじょうおうきょう</sup>という名はその最たるものでしょう。光明が一番すぐれていると。そして金光<sup>こんこう</sup>というのは、ダイヤモンドのごとくこの信念はゆるがないというのが経文の恐らく精神でしょう。それが金剛の字のつく経にもなる。その経が国家鎮護、個人の救済よりもこの国家を守っていく。その国家の安泰をその経が護持していく、守護していくという意味で金光明最勝王經<sup>こんこうじょうおうきょう</sup>というのは、聖武天皇の時に一番大切にされた仏典の一

つであり、そして仏教が国家鎮護の仏教となるわけであります。これを見ても仏教というのがまったく統治政策であるということがわかるのである。

では仏教政策は8世紀の日本で終ったのかといふとそうではなく、これは江戸幕府によって再びとり入れられている。奈良時代を過ぎて平安、鎌倉時代になると仏教は完全に日本のになります。浄土真宗を徳川幕府が統治政策に利用しています。それは、どういうことかといふと徳川時代では身分が士農工商、侍が一番偉い。商人が一番下位になっております。この四階級の下にもう一つ階級があった。これをレベル以下の階級にしたのです。士農工商として商人が一番下位では、商人がおさまらない。商人を怒らすと徳川幕府というものは倒れるかもしれない。実際倒れるでしょう。つまり、流通経済、金融経済になって商人の天下になっているので、なんとかこの士農工商の最下位の商人をなだめなければならない。そのためにはかれらの下にもう一つ下の階級をつくらなければいけない。これが未解放部落の存在となるのであります。そして、その最下級の人達は救われない。では、どのようにすれば彼らをなだめることが出来るかということで利用された宥和政策が浄土真宗であります。ですから今日、田舎の未解放部落に行きますと真宗の寺院だけは大きいのです。これは、つまり現世ではあなたたちは不幸であるかもしれないし、恵まれていないかも知れないが今、真宗を信心しておけば、来世にはきっとこの善行が報いられて、結構な身分に生まれるという宥めの政策なのです。本願寺は時の政権に利用され、そして徳川幕府とこの本願寺

との密着ができる。本願寺は、一方ではそういう権力と結んでおきながら徳川幕府の治安維持に貢献したと思うのです。仏教が近世日本の政治手段に使われた一つの例だと私は思います。

(了)

(財団設立10周年記念文化講演会における)  
講演録

## 保護財団の活動

### 京の伝行事、芸能功労者12人を表彰

(4月10日於：都ホテル)

当財団では、京都の伝行事、芸能の保存と継承に長年、貢献され功績のあった功労者の表彰を昭和45年からおこなっていますが、昭和55年度は功労者12人を表彰。さらに当財団の基金募集に多額の御協力をいただいた篤志者の方々に感謝状をそれぞれ贈呈しました。

受賞者は次のとおり。(敬称略・順不同)

#### ◆伝行事・芸能功労者

松下三男	「賀茂競馬保存会」
辻寒造	「藤森神社駆馬会」
高橋貞次郎	「雲ヶ畑松上げ保存会」
倉貫健太郎	「北白川伝統文化保存会」
渡辺常三	「鞍馬火祭保存会」
持明院基邦	「蹴鞠保存会」
中川平	「平安雅楽会」
藤岡巖	「吉祥院六斎保存会」
小山勝義	「梅津六斎保存会」
八木勇一	「小山郷六斎保存会」
近藤光蔵	「西院六斎保存会」
上野新兵衛	「今宮やすらい会」

## ★文化観光資源保護協力者

(法 人)

株式会社大倉工房・京都府民信用組合

株式会社京都プリンスホテル

近畿急便株式会社・佐川印刷株式会社

佐川急便株式会社・清和商事株式会社

株式会社淡交社

(個 人)

大槻 敏夫・杉島 勇・田中 清

納屋 嘉治・村上健三郎

## 京の四大行事など88件に対し 総額 8,006万円を交付！

——昭和55年度文化観光資源保護事業に  
対する当財団補助金——

昭和55年度中におこなわれた文化観光資源保護事業で当財団文化財専門委員会において補助対象として選定された保護事業88件に対しある。4月10日開催の第24回理事会、評議員会において総額 8,006万円の補助金交付を決定しました。

### ○昭和55年度補助金交付一覧表

#### 1. 四大行事保存執行に対する助成

10件 補助金 4,480万円

対 象

○葵祭（葵祭行列協賛会）

○祇園祭 山鉾巡行（祇園祭協賛会）

山鉾修理（祇園祭山鉾連合会）

○大文字五山送り火

点火執行（大文字五山送り火協賛会）

施設整備（大文字五山各保存会）

○時代祭（時代祭協賛会）

#### 2. 文化観光財保護事業（国庫補助を伴わないもの）に対する助成 ない



当財団の助成により修復された愛宕念仏寺仁王門

34件 補助金 2,030万円

建造物の部 16件 補助金 1,245万円

美術工芸品の部 7件 " 290万円

防災施設の部 5件 " 235万円

環境整備の部 6件 " 260万円

対 象

愛宕念仏寺仁王門移築修理工事・松尾大社樓門屋根檜皮葺替工事・毘沙門堂宸殿障壁画修理・法然院自動火災報知設備工事・仁和寺境内南側土塀修理工事ほか

#### 3. 伝統行事、芸能保護事業に対する助成

42件 補助金 946万円

対象

賀茂競馬・藤森駆馬・鞍馬竹伐り・松上げ、すいき祭・鞍馬火祭・けまり・雅楽・狂言・六斎念仏踊・やすらぎ踊・久多花笠踊・八瀬赦免地踊・上棟祭ほか。

#### 4. 文化観光資源景観保持に対する助成

2件 補助金 550万円

対象 松毛虫駆除事業ほか

総件数 88件 補助金総額 8,006万円

祇園祭など京の文化財をいつまでもまもるために

## 新たに基金5億円募金をはじめる

目標達成のために あなたのご協力を!

当財団では、京都の文化財、伝統行事・芸能などのすぐれた文化観光資源をまもるための基金募集運動をくりひろげ、各界からの積極的なご協力を得て初期の基金目標額の10億円募金を達成し京都の文化観光資源保護事業をすすめてまいりました。

募金は当初の目標を達成はいたしましたものの現在の基金規模では、これらすぐれた文化観光資源を保存継承していくには極めて不十分な状況にありますので、さる4月10日開催の第24

回理事会、評議員会においてこうした事態に対応するためあらたに基金5億円を目標に募金活動をくりひろげて、文化観光資源保護事業の促進をはかっていくことを満場一致で決議されました。

会員の皆様方におかれましては、さらにご無理をお願いすることになりますが、この趣旨をご理解いただき、なにとぞご協力の程よろしくお願いいたします。

### 第29回文化財特別参観のご案内

#### —知恩院—

今回は、京都洛東屈指の名刹、浄土宗の総本山知恩院の参観をおこないます。是非ご参加下さい。

◇参観日時 昭和56年7月4日(土)

午後2時(参観時間約2時間)

◇対象者 財団募金協力者(会員)とその家族

◇申込方法 住所、氏名、年令を記入し60円  
切手同封の上、封書によりお申  
込下さい。

◇申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺  
町 京都会館内

京都市文化観光資源保護財団

◇参加費不用

\*お問い合わせは財団事務局まで。なお、参加  
ご希望が多い場合制限することがあります。

### 編集後記

毎回、会員の皆様に親しんでいただいております当会報も次回で第30号の発行をむかえることになりました。これもひとえに皆様方のご支援のたまものと感謝いたしております。今後はさらに、内容を充実させこの会報を通じて一人でも多くの人達に当財団が行なっている京都の文化遺産をまもるための運動に参加していただけることを願っております。今後も皆様のご意見、ご希望を気軽によせ下さい。

#### —表紙写真解説—

##### ■鹿苑寺(金閣寺)方丈襖絵

当襖絵は、延宝6年(1678)後水尾天皇の寄進により再建された方丈におさめられており、延宝9年(1681)狩野外記敦信の作と伝えられる。

昭和53年度 破損著しいため修理がおこなわれ、当財団補助対象になったものである。